

「初三郎式、かながわの描き方」にぼれ話

にいだ しゅういち
新井田 秀一(学芸員)

はじめに

神奈川県立生命の星・地球博物館(以下、当館)では、2025年7月から特別展「初三郎式、かながわの描き方—地形表現の科学—」を開催しています。ここでは、特別展の概要を紹介するとともに、展示のこぼれ話も紹介します。

特別展の概要

今回の特別展は、今まで行ってきた鳥瞰図ちょうかんずに関する研究の成果をまとめたものです(例えば、新井田・武田, 2024)。タイトルにある「初三郎式」とは、大正から昭和初期にかけて活躍した画家、吉田初三郎やその弟子たちが描いた鳥瞰図の持つ独特の画風を指します。吉田初三郎の描く鳥瞰図は、地域の姿を伝えるメディアとして関心が高まっています(昭文社編, 2021)。本展では「神奈川県鳥瞰図」をはじめとして、県内各地を鳥瞰図で紹介します。さらに

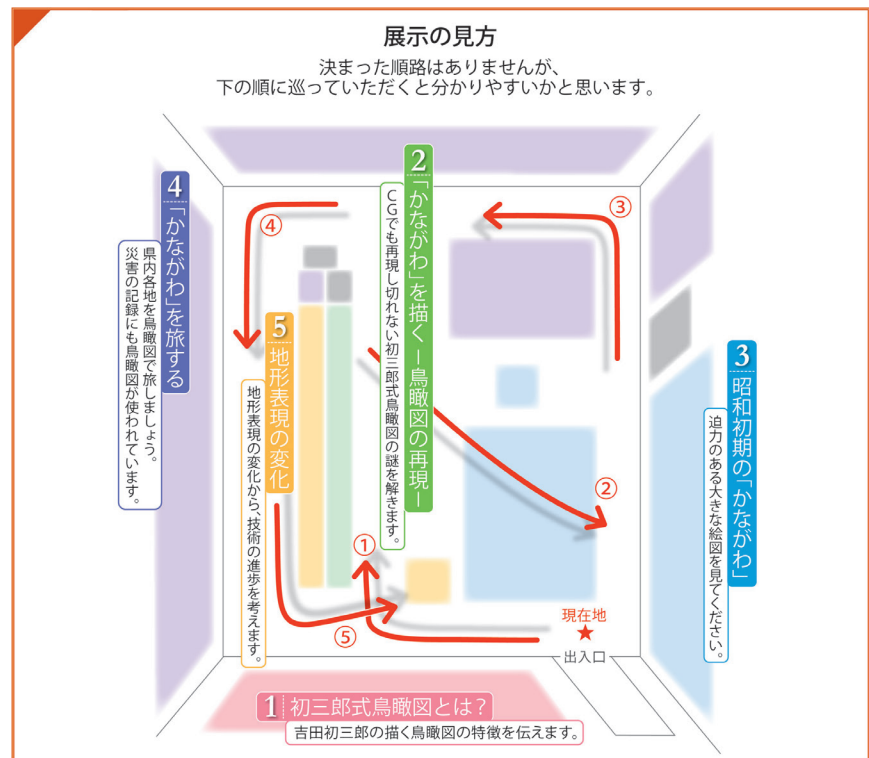


図3. 案内図「展示の見方」。



図1. 展示室内「神奈川県鳥瞰図」と床貼り地形図・地形模型。



図2. 鳥瞰ポイントを示すサイン越しに見た地形模型。

飛行機での移動が自由ではなかった時代に、このような絵図をどのように描いたのか、自然科学的な視点で解説します。

今回の展示点数は、肉筆画4点、肉筆画の実寸出力3点、絵図46点、書籍4点、絵葉書1点、地図8点、CG6点、模型1点、PC1点の計74点です。

展示プランの悩み その1

一番大きな展示物は、横幅4 mの吉田初三郎・作「神奈川県鳥瞰図」と床に貼った3×3.7 mの地形図『昭和10年頃の「かながわ」』です。どちらも平面的な展示物です。地図から地形を読み取ることを苦手になっている方は多いと思います。そこで地形を直接、立体的に認識できる資料として、「25万分1地形模型」を用意しました。展示空間を構成する意図として、この3点を組み合わせ、同時に見比べることを優先した配置を検討しました。

「神奈川県鳥瞰図」はケース内に展示することを考えましたが、一番大きな展示ケースでも幅2.5 mしかありません。そのため、特別展示室の壁面に露出して

展示することにしました。鳥瞰図には右側にタイトルがあることから、左回りの順路とし、展示室に入って右側の壁面に掲示しました。そして、鳥瞰図に正対した床面に、地形図と地形模型を配しました(図1)。

「神奈川県鳥瞰図」は、神奈川県立歴史博物館の所蔵する肉筆画を富士ゼロックス神奈川株式会社がデジタル化したものを、当館で不燃性の布地に出力しました。地形図『昭和10年頃の「かながわ」』は、土足で踏んでも大丈夫なように表面を艶消しコーティングしたものを床に貼り付けました。「25万分1地形模型」は台の上に露出で展示しましたが、製造後30年以上経過し素材の劣化が気になるため、周囲にバリアを設置し、「触らないで」というサインを表示しました。

さらに地形模型は、鳥瞰図を自分自身で再現する(地形を覗き込む)ことでの活用を意図しています。そこで「ここから見ると『神奈川県鳥瞰図』のように見える」などといった覗き込みポイントを示すパネルを掲示しました(図2)。



図4. キャスター付ルーペ「大きく見えるくん」とその駐車スペース。

展示プランの悩み その2

メインとなる展示配置は定まったのですが、今回数多く用意した鳥瞰図の配置が次の課題です。神奈川県内の観光地について明治から昭和初期に制作された鳥瞰図の印刷物(実物)を集めました。特に吉田初三郎・作「箱根名所図会」は、箱根湯本にある萬翠楼福住・所蔵の原画の複製1点をはじめ、大正から昭和初期にかけて印刷された出版物(11点)を揃えたことも展示の目玉です。初三郎の生い立ちや鳥瞰図の構図解析などの解説を動線の始めの方に入れる必要があり、展示ケースの大きさを考慮しながら配置していったため、展示動線を単純な一筆書きにできなくなっていました。

展示の内容としては、どこから見ても分かるようにケースごとに独立していますが、展示コーナーの章立ては番号付きとなっています。

そこで展示動線を示すために「展示の見方」を作りました(図3)。この図は、展示室をその真上から見ているような構図にしています。特別展をご覧いただく際には、ぜひとも活用していただきたいと思います。

床貼り地図の工夫

床貼り地形図『昭和10年頃の「かながわ」』は、「神奈川県鳥瞰図」が制作された時代を知るために、同じ時代に作成された5万分1地形図を連結しました。神奈川県内は時期を揃えることができたが、東京や千葉にまたがるエリアは大正期や戦後のものも混じっています。

地形図は、床に貼ってしまうと目からの距離が離れ読みづらくなるため、2倍に拡大しました。そのため、縮尺は2万5千

分1に相当します。これだけではまだ文字が小さく感じたため、約2倍に拡大できるキャスター付ルーペ「大きく見えるくん」を用意しました(図4)。

これは2004年度企画展「+2℃の世界縄文時代に見る地球温暖化」の際に、海岸線の時代変遷を示した床貼り地図を見るために職員が製作したものが原型です。今回、光源を豆電球からLEDに、電源も単一乾電池8本からモバイルバッテリーにリニューアルしました。外見も地形図や鳥瞰図によってきれいに飾り付けしました。この作業もボランティアの方々に協力していただきました。

このようなキャスターのある展示器具は、予想以上に移動してしまうことがあるため、駐車場マークを床に設置して、定位置に戻すことを使用した方に意識してもらえるようにしました。

現在の地形図の原型は、箱根から

もう一つ展示している床貼り地形図「明治20年頃の西湘」は、2万分1地形図を連結したものです。紹介するのは明治21(1888)年に作られた「箱根驛」です(図5)。測量・地図百年史(1975)には、「明治18(1885)年に三角測量及び水準測量の測量成果に基づいて、神奈川県「箱根」付近から全国的規模をもって、2万分1の縮尺で地形測量を開始し、大正元年に至って一連の測図を終了している」とあります。これが「正式二万分一地形図」と呼ばれるものです。箱根周辺の地形図は、陸地測量部沿革誌(1922)の附図「製版進程」によれば、明治20~22年に製版されていたとあります。

この地形図は、多面体投影図法により緯度6分、経度4分で区切られた横型の地図です。さらにはグリニッジを基準とした経緯度が採用されていることから、現在に繋がる地形図の原型といえます。

連結した地形図のうち、「佐野」「三島」は、図式が変更されたのか等高線間隔が異なっています(5 mごとに細線・20 mごとに太線から、10 mごとに細線・50 mごとに太線へ)。そのためか、地形表現の印象が違ってきます(図6)。

おわりに

特別展「初三郎式、かながわの描き方

ー地形表現の科学ー」は、2025年11月9日まで開催しています。この記事を見て、関心を持たれましたら是非ともご来館をお待ちしています。

なお、この研究はJSPS 科研費19K01149、19K13451、23K00965の助成を受けて実施しました。

参考文献

- 昭文社編, 岡田直解説 2021.『吉田初三郎 鳥瞰図集』, 昭文社.
測量・地図百年史編集委員会 編, 1970. 測量・地図百年史. 社団法人日本測量協会.
新井田秀一・武田周一郎, 2024. 吉田初三郎・作「神奈川県鳥瞰図」の構図をCGで再現する. 日本地図学会2024年度定期大会予稿集.
陸地測量部 編, 1922. 陸地測量部沿革誌附図. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/965770> (参照 2024-05-08).

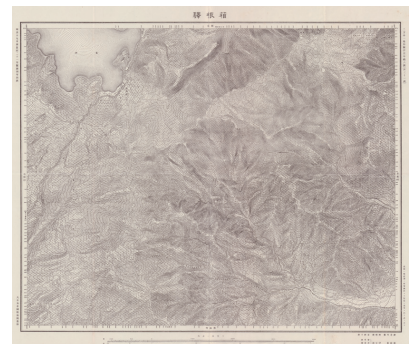


図5. 2万分1地形図「箱根驛」KPM-NZA000001.



図6. 床貼り地形図「明治20年ごろの西湘」より山伏峠付近(上:「神山村」・下:「佐野」の連結)。